



TITLE:

會員よりのたより

AUTHOR(S):

---

CITATION:

會員よりのたより. 天界 1942, 22(256): 345-346

ISSUE DATE:

1942-09-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/168439>

RIGHT:

## 會員よりのたより

### た　　よ　　り

拜啓（前略）24時間制採用の結果、所持の時計を如何改造すべき哉、問題にて、時計屋の話では、時計の齒車の刻みを倍に致し、文字板を取換へる方法は、無理なる由にて、結局新しく設計製作せねばならぬとの事に候が、如何に御座候哉、御高教賜り度存候。次に、時計の文字板のみを變更、赤字で13以下24まで書き入れる方法は、既に出来居る様に存居候。24を記載するは、無意味にて、0とするが宜敷と存候。此點、一般が24を採用する以前に、0の方便利なる事を普く知らしめる必要も有之可申哉と存候。此點についても、御高教被下らば幸甚と存候。先は右御伺ひ迄。敬具

七月25日

井　本　進

### 南方より短僭

（前略）晴れました夜は、ひまを見つけて、“南”の星を見て居りますが、いつの間にかやら、眼を北の星に移してゐます自分が、おかしくなります。やはり見慣れた星が宜いのでせうかと、獨りで笑つて居ります。黃道光（西天）が白鳥の銀河の一倍半ぐらゐの明るさです。

さそり座、いて座等は、中天に浮かべて見ますと、日本の内地のやうに地平の近くで見ますより、又、趣きが違つたもので御ざいます。殊に、あの附近の銀河を小さなレンズで見るのを楽しみにして居ります。南十字も、さることながら、南冠座を美しいものに見て居ります。

馬來派遣軍　本　田　實

### 比　島　だ　よ　り（第2信）

拜復、御葉書並に“天界”星圖等七月24日正に拜受、思ひがけす“天界”が参りまして、大變嬉しく拜見仕りました。星圖も早速に御送付下され、道案内を得まして、安心致しました。これから、これをたよりに、山本先生の“天球と星座”を師として、眺めるつもりです。自分と同じに星を眺めておられる皆様のことを思ひ乍ら、本當に、星に對しては、自分も皆様もその間の距離など考へられませんか。只今（七月に入つて）當地は雨季にて、星の姿とも無沙汰しております。昨日、久し振に22時、雄大な“サソリ”の全姿を見ました。實に驚くべき勢にて、中空にハネ上つて、“サソリ”なるかな!! と見上げておりました。簡單乍ら御禮まで、匆々。

七月27日

比島派遣軍　栗　田　正　男

## 時計の圖にそへて

在來の盤面の内側に 13~24 を書くよりも、此の圖(表紙繪)の様にする事を主張します。1 から 12 までの時数は、誰でも覚えてゐて、數字を読む要がありません。私方で實行してゐます(公衆用の時計)。

七 月 9 日

金 澤 市 池 亮 吉

## 編輯室より

野尻氏は、どこまでも星座星名の研究者として精進せられる。北ボルネオに行はれる星の名など、とても普通には獲られない材料である。さらに舊蘭印の他の地方や、フィリッピン、佛印、タイ、ビルマ、ニウギニヤあたりの珍しい話題が、今後も紹介されんことを望む。▲渡邊氏の“梅小路天文臺”の記事も興味が深い。只、残念なことに、一枚の地圖(京都市内の必要な點を示すもの)が添へられなかつたことは、惜しい。近いうちに、何とかして、この欠を補つて頂きたい事を、讀者と共に希望したい。▲山本博士の中等學校天文教材論は、意外な方面にも熱心に讀まれてゐるらしい反響がある。本號を以つて此の稿は終つたが、今後、更に實地について詳しい指導文が待望せられる。嘗に、中等學校のみならず、初等學校の方面でも、又、幼兒の保育教育の方面にも、天體に對して或る程度の關心が拂はれる傾向にある由であるが、かうなつて來ると問題は寧ろむづかしいのではないだらうか。幼兒と天文!——去る八月下旬、堺市の學事課主催で天文學の講習會が開かれ、百人ばかりの學校教師たちが、山本博士や高城、佐伯、室田諸氏を中心として、殆ど徹夜してまで勉強した由であるが、山本博士の意見としては、幼兒や兒童に對しては、天文の知識を、成るべく與へないやうに、教師諸君は注意すべきであるといふのらしい。之も一理である。今日の學校教師は、とかく物を教へたがる。そして却つて多くの弊害を起しつゝある。勿論、教師自身は、子供ではないのだから、ウンと勉強して、いろ々々の知識や體驗を、澤山持つてゐるに越した事はない。しかし、そんな知識などを振りまはして、子供を苦しめては、子供たるものは、たまつたものでない。せい々々學校の教科書に書いてある程度のことを、よくかみしめて教へ込むことに止めるが良いと思はれる。▲編輯室の机上に良い原稿が山積してゐて、それを消化するために、次號まはしになるものが澤山あるのを感じてゐて頂きたい。午の歳に因む“馬の星座”の記事が、はや年の半ばを過ぎた今頃現はれたのは、全くこの記事輻輳のたゞりであつて、大に御詫び申上げる。(U. V. W.)